

選挙研究と政治理論

嶋崎, 譲
九州大学法学部

<https://doi.org/10.15017/1448>

出版情報 : 法政研究. 29 (1/3), pp.319-333, 1963-02-28. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

選挙研究と政治理論

嶋 崎 讓

まえがき

現代日本における政治過程を、大衆運動の組織化過程の構造分析を通して明らかにするために、福岡県の場合を例にとりながら、いくつかのケース・スタディを発表してきた。そのなかには、国家政策の決定過程において重要な局面を構成する選挙過程についてのいくつかの調査・分析もふくまれている。^(一) これらの調査・分析に際し、私は、選挙過程を革新政党の指導による大衆運動の組織化過程としてとらえるという方法を採用してきた。この方法は、「普通選挙権は労働者階級の成熟の尺度である。今日の社会ではそれ以上のものではありえないし、またならないであろう。」とかつてエンゲルスがのべたことを無意識のうちに前提として、選挙過程が、革新政党にとっては、日常的な大衆斗争の一定の段階における政治的な総括であり、また同時に選挙過程自体が一つの大衆斗争であるという考えの上に立っていた。この考えには一つの仮設が前提とされていた。

それは、マルクス主義的前衛党が自然発生的な大衆の要求を目的意識的に指導していくならば、階級意識の組織化が可能であるというマルクス主義的階級闘争の見地である。その際における階級意識の組織化とは、社会発展の法則性にしたがっての労働者階級の運動の歴史的合法則性を認識しうる前衛集団の組織化過程である、というように理

解してきた。この理解には、非合理的な人間の集団心理を合法的に組織化できるという合理主義な思惟を前提としているということが出来る。歴史の発展を巨視的に見れば、マルクス主義のこの思想方法は、前衛政党の指導の思想方法としてその生命をもちつづけていることはたしかである。しかし、政治現象を徹視的に見るならば、この思想方法のなかには、階級意識の組織化過程にあらわれる波動の振幅を見落す危険がある。現実には、非合理的な集団心理それ自体が媒介態となつて、革新指導にそのまま組織化されるというような事態がある。その典型的な構造が選挙過程においてあらわれる。マス・コミに操作された非合理的な大衆の行動様式 *mass behaviour* がそのまま投票行動 *voting behaviour* となつてあらわれる場合や、企業別労働組合にあらわれる前近代的な企業主義的丸かかえの意識構造がそのまま革新政党の支持基盤に組織化されるという非合理的な大衆的行動様式、マルクス主義的イデオロギ―で組織化されているはずの共産党が日本社会に伝統的な前近代的な部落的な『後援会組織』を通じて投票行動を組織化しようとする行動様式などがそれである。

これらの事象は、選挙過程の把握の方法をより精密にしなければならないことを要請している。すなわち選挙過程を階級斗争の組織化過程として総括しようと見る楽観的な合理主義的思惟のみでは、非合理的な政治的行動様式を立体的にとらえることができないからである。かくて、現代の政治学が政治における人間性の非合理性を前提として追求してきたいわゆる「科学的方法」*scientific method* を、どのように選挙の調査・研究に適用するかについての検討が必要とされるように思われる。しかし、本稿では、立ち入ってその方法についての検討はさき、現代までの政治理論と選挙研究との関連を指摘するにとどめたい。この関連を明らかにしておくことは、選挙の調査・研究の科学的方法を確立する重要な前提となるからである。そのみならず、この分野にマルクス主義の理論とその方法を適用することは、古来の政治理論がこの分野に残した研究成果を歴史的に継承、発展させていくことになることも示される

であろうからである。また、そのことは、政治現象の形態論的把握と行動論的把握との対立という政治学上の根本問題の解決にも到達できることになるであろう。

二

選挙に関する研究方法は、大別して二つの流れに分類することができる。一つは合理主義的制度論的アプローチであり、いま一つは経験論的・過程論的なアプローチである。それらは、政治学上の論争をよんでやまなかった、政治現象への形態論的なアプローチと行動論的なアプローチとのそれぞれに相当するが、前者は選挙研究に際して *What do elections mean?* を問題意識として、選挙制度 *electoral system* に重点をおき、後者は、*How do elections work?* を問題意識として、選挙過程 *electoral process* に深い関心を示してきた⁽¹⁾。この二つの流れは比較政治学的に見た場合、大陸型(ソ連・東欧をふくめて)の政治学と英米の政治学の系譜とにそれぞれつながるものであり、政治理論史的に見るならば、伝統的、古典的な政治理論と経験的、実用的な現代政治理論とにそれぞれ系譜化することができるであろう。

これら二つの選挙研究におけるアプローチの相異について、フィレンツェ大学の Giovanni Sartori の『選挙研究と民主理論』⁽²⁾は示唆に富んでいる。氏は、二つのタイプの選挙研究を支える理論の相異が、合理主義的理論 *rationalist theory* と経験的、実用主義理論 *empirical and pragmatic theory* とのそれであり、仏・伊型かアングロ・サクソン型かのそれであるとしている。前者の研究は主として説明的 *interpretative* であり、後者のそれは記述的 *descriptive* であると特徴づける。前者が説明的であるというのは、次のような意味においてである。すなわちこの研究者は代表民主制の特徴としての選挙からいかなることを推論しようとしているか? という問題意識の上に立っ

ており、民主主義的一般理論の基準に照してみて選挙研究から何を学ぼうとするか？を重視する。^(四) いかえれば選挙の研究が、民主主義理論の上に立って価値的に解釈されるという方法であるといえるであろう。後者が記述的であるというのは、このタイプの研究が「事実の調査と類型化以上のものを導こうとしない」という意味である。^(五)

これらの相異は次の二点のような意味をふくんでいる。

(一) 合理主義的な思惟が支配しているデモクラシー体制の下では、理論が極めて重視される。例えばイギリスにおいては、真のデモクラシーか、偽りのデモクラシーかを選択するために投票しないが、イタリーやフランスにおいては、そのために投票する。最近のフランスの選挙に見られるように、大陸ヨーロッパにおける投票行動はデモクラシーをめぐる理論的な論争に深く影響されている。理論が選挙の動機として直接に反映するがゆえに、有権者が非立憲的反対派を選択するというような事態があらわれる。したがって、合理主義の支配する体制のもとでは政治生活における緊張がすどくあらわれる。

(二) デモクラシーに関する合理主義的アプローチは、つねに理論と現実との対立に際して、現実と対決して合理主義的理論に現実を合わせようと試みる。経験的アプローチは、現実に合わせて理論を調整し、訂正するべく事実を利用しようとするのである。したがって経験主義の支配する体制のもとでは、政治生活は極めて安定的な形であらわれる。

この二つの相異点から、合理主義的研究は理論を尊重し、経験的研究は理論を軽視するということにはならないとし、Sartori は、次のように問題を提起している。

「多くの大陸の観察者は、イギリス的民主主義の下では、言葉の厳密な意味での理論がない、と主張する。またイギリス人は理論的なアプローチに関心をもたない、とも主張する。しかし、これは事実にあったいい方ではない。経験的理論にとっては、その理論が事実スムーズに適合しているために、その理論を見究めることは困難で

ある。このアプローチにおいては、理論の関心事は実際の結果に注意を払うことであるために、事実が理論に適合してあらわれるのであって、理論がないことを意味しない。……かくて合理主義者は理論にうるさく、合理主義を支持しない人は、理論を軽視しているということにはならない。いずれにせよ、理論は重要なのである。なぜなら、人間は行動 behaviour でもって理論に答えるからである。したがって、相異させている（選挙研究における二つの立場の相異―筆者）ものは、理論がいかに立てられるかということである。^(六)」

三

そこで「選挙は何を意味するか」という問題意識の上に立つ合理主義的な選挙研究の方法は、いかに理論をくみ立てようとしているかについての検討にかからねばならない。

合理主義的な民主理論の体系においては、選挙のよって立つ基礎 electoral foundation とその正当性 legitimacy が核心的な意味をもっているといえることができる。「合理主義 rationalism は演繹的思考法 deductions を好む^(七)。」「演繹的方法とは、人間の政治的、社会的本性についての単純な仮設を設けて、国家の本性或国家への市民の義務についての包括的理論をその仮設から演繹する^(八)という思考方法である」といえるであろう。選挙研究におけるこの方法は、人民の意思、人民の権力がア・プリオリに前提とされ、政治過程や立憲的国家構造がその忠実な執行を証拠立てるものでなければならぬ、というように体系化しようとする。人民の意思を確かめることが民主主義にとって本質的であり、核心的であるとみなすところに特徴がある。

この思考の方法は、G・H・Sabine が指摘したごとく「プラトンが、彼の労作に際して、人間関係は合理的探究の対象となりうるものであり、これに知的な方向づけを与えうるということを建て前としたこと」また「アリストテ

すが、政治理論におけるより一般的な倫理原則を、國家というものは本来、精神的に平等な自由市民の間に結ばれる関係であって、その行動は法に遵い、その基礎は強力ではなくてむしろ討議と合意にあるべきものだという確信にいたその時以来、ヨーロッパの政治哲学から姿を消したことがなかった^(九)ものであるという意味で、古典的 classical 方法といえるものである。また近代民主主義のイデオログたち、例えば、ホップス、ロック、ベンタムなどの理論の基礎的方法でもあったという意味で伝統的 traditional 方法とも称しえよう^(一〇)。さらに、L・ブライスが『近代民主政治』において、中央、地方政治における主なる制度についての制度論的研究を行った場合でも、その方法が、事実を語らせ一般化を試みようとしなかった限りに^(一一)おいて記述的方法の先駆者といわれるけれども、彼は民主主義を市民の多数意見がたえず表示されるものとして描いていた^(一二)。オストロゴルスキーやミヘルスなどの政党組織の研究者はしばしば「民主主義の合理的な神話の犠牲^(一三)」となった。彼らが、政党なしのデモクラシーを想定しえず、政党の研究を深めれば深めるだけその構造が非民主的であることを知って、G・ウオラスも指摘するごとく、「価値的な一般的な結論を引きださず、記述と分析とを分離せざるをえなかった^(一四)」というのも、民主主義のア・プリアリな神話の仮設を前提にしていたことの結果であるともいうことができる。

古典的、伝統的方法の上に立つ選挙研究はしたがって、次の三つの特徴を内包しているといえる。

(一)人間の政治的、社会的な自由、平等をア・プリアリなものとして設定し、それによる政治社会の合理的構成を可能にするという思想方法を前提とするがゆえに、政治社会の合理的構成を可能ならしめる制度の形態論的研究に關心を示すという特徴である。選挙制度が非常に重要な研究対象とされ、ある選挙制度は民主的であるが他のそれは非民主的であるというように比較制度的研究を重視し、比例代表制度が真の代表を可能ならしめるものであると結論づけられ、真の平等の代表こそが民主主義を最高にまで高めさせるものであるとされる。かくてこの方法による研究の関

心事は、採用される選挙制度の完全性^(二四)・眞の代表制 *true representation* に向けられる。すなわちプラトンやアリストテレス以来、学問はおよそ形態学でなければならない、とされた立場の継承であるといえる。したがってこの方向は「選挙研究における他の重要な局面である政治的リーダーシップの研究が多かれ少かれ無視される傾向をもっている」^(二五)ということができる。

(二)「合理主義的民主理論の方法は、立憲制に深く関係する選挙の正当性 *electoral legitimacy* にその関心を向けると。そして、内閣政治やチェック・アンド・バランスの均衡理論は議会制に従属するものとされる。執行は民主主義という議礼上の用語 *ceremony terminology* が指示しているところのものとしてまさにあらわれねばならない」^(二六)ケルゼンが、民主主義の形態としての議会制を、人民の普通選挙権の基礎の上に、したがって民主主義的に選挙された合議機関によって、多数決原理に従い、規範的国家意思を形成する制度であるとしたように、議会制を前提とした選挙の正当性を強調するという特徴である。

(三)合理主義的民主理論は、「民主主義は、人民が積極的に統治する *govern* 体系としてよりも、権力を統制する *control* する工夫として重要視される。もしも J・S・ミルの議論が、人民は誤って支配されないために政治的権利を必要とするのだということであったとすれば、人民は自らを支配すべきであると主張する」^(二八)という思考の特徴をもつことによって、選挙研究における(一)、(二)の特徴を支える基礎となっているということができる。

このような合理主義的な演繹的伝統は、大陸ヨーロッパにおいては、その影響を直接ルソーに負っている。ルソーの有名な言葉がここで想起されねばならない。「人間は生れたとき自由である。だが至るところで鉄鎖につながれている。」この思想は、人間は手足をもって生れてくるように権利をア・プリオリに賦与されて生れてくるということである。人間は足枷によって手足の自由を奪われるように、君主の専断的行為によってこれらの権利の享受を奪われ

る。伝統的政治理論において、ルソーが提起したこの自由は、「必然性の認識」として定義され直した。しかし、マルクスが定義したのとは異った観念的合理主義の思想においてである。T・D・ウェルドンが指摘したごとく、その考え方は単純明快である。「もし自然の必然性がわれわれに残しておいたもつとも有利な行動コースをとることを法が専断的に妨害しないならば、われわれは自由である。さなければ鉄鎖につながれている。……人間は、自己の最善の利益になることを追求することが法によって許されている、と定義し直された意味で自由である。つまり、人は自分がどのような行為をしたら不可避的にかなる結果をもたらすかを知っているし、また簡単に発見できる。必要なことは、たんに法によって結合される知性をもつ人間の集りが前提とされることであり、それがあらゆる専断的な制限から自由を保障するのである。……人間の専断的支配を合理的管理におきかえよ。しからば万事うまくゆく。このルソーは信じた。^(一九)」この種の思考は、われわれが民主主義の目的やレーゾン・デートルを問題にするとき、われわれをしてギリシヤの古典に思いをよせしめる。そして合理的な知的模型は、民主主義を語源通りのものとする単純な理解によって、人民の意思、人民の権力を民主主義の判断の基本たらしめるのである。ルソーが古典的理想を彼の時代にアッピールさせてひとびとに感動を与えたように。

しかし、合理主義的民主理論が、恰も現代の民主主義が都市国家のそれであるかのようにギリシヤの理想を現代に適合させ、知性ある人民の意思、人民の権力による統治の可能性を仮設したとしても、ルソーが看破したように「いたるところでつながれた鉄鎖」の現代的条件は、その理論に事実をもって挑戦している。理論と現実とのギャップは、この理論の上に立つ選挙研究をして、ますます真の代表制の制度論的検討、選挙の正当性の強調に力点を置かせることによってそのギャップがうめられるという確信を強化する。しかし選挙研究におけるこの研究から多くの成果を期待しうるのは、政治的世界を合理的に構成しうるといふ政治的人間の合理性を前提とする限りにおいてである。

しかるに、古典的、伝統的思考は、政治的人間の合理性をア・プリオリなものとしてとらえていたということは、すでにのべた通りである。この限り、この思考の上に立つ研究は観念的構築物とならざるをえない。したがって「観念的合理主義」を「科学的合理主義」の理論に転化させることなしには、伝統的方法を現代に継承することにならない。

四

「選挙はいかに作用するか」という問題意識の上に立つ経験的な選挙研究が、選挙過程に重点をかけ、記述的な方法を採用するという特徴をもってあらわれるという根拠を明らかにする段階にいまや到達した。伝統的な演繹的思考は、人間の本性をその合理性に求め、自由な個人の結合としての市民社会の調和を予定し、政治社会の合理的構成を信じていた。しかし、G・ウオーラスが、『政治における人間性』において、「合理主義的思想家はしばしば政治行為は必然的に手段と目的についての推論の結果であると想定するばかりか、あらゆる推論は同一の合理的な型に属すると想定している。…しかし人々が彼らの政治上の意見を形成する半ば無意識の過程の多くは非合理的であることは明らかである」として現代民主主義の政治状況を經驗的に明らかにしたとき、それは伝統的な思惟への挑戦であった。

その挑戦の政治的状况は次のような形であられた。それはいわゆる巨大社会 *great Society* ないし大衆社会の状況である。古典的民主主義論では、政治的な行動が生れるに先立って、その行動を決定する個人間で合理的討論が行われ、そこから生ずる世論は、人間理性の誤りなき声である、と前提されていた。このことは次の諸点で疑問視されるにいたった。(1)微妙な複雑な問題にたいして決定を下すには、専門家の手をかりる必要があるという認識。この世論を代表して決定を下す人間と世論を形成する人間との間に大きなギャップを作りだし、民衆の権力への参加がパッシヴなそれに転化したこと。(2)フロイドが指摘したように、街頭の人間の行動は非合理であるという発見。

(3) かつて自律的理性であると思われたものがじつは社会的に拘束されていることの発見—マルクスによってなされた
 ごとき発見。(4) 個人の自由を前提としての合理的社会の予定調和の思想が、改革によってつくりだされねばならぬと
 いう功利主義の教義に変わり、ついで階級闘争をとくマルクス主義の教義にとってかわられつつあること、などである。

G・ウオーラスは、これらの事情を『巨大社会』で描写しつつ、新しい社会に対応した政治理論が「人間活動の再検討を行わんとするならば人間の知性を誇張する自分自身の傾向を克服することからはじめねばならない」とし、人間が自己の行為を合理化しようとしたり、自分自身も他人と同じように行動するという仮説を立てる習慣を人間のもつ弱さと見たのである。そして政治的人間における非合理性こそ追求すべきものであるとした。したがって人間の非合理的本性—衝動と本能—を社会的環境との関連で明らかにすることを政治学の課題としたのである。経験的な現代政治学が「政治的思考以前に、われわれが思考しうる事実は何であるかを知ることによって政治学の内容を豊富にしていくことができるし、政治学の主たる問題は、データと事実に関する知識であり、この問題はデータにもとづいて推論する以前に解決をせまられていることである。古典的な政治理論はこの点においてドグマティックに事実を解釈してきたという意味で科学的方法でなかった」としては、ウオーラスの問題提起に直接負っているということができよう。したがって、政治的人間の非合理性を事実として経験的に把握することを課題とする現代政治学にとっては、その非合理的な人間心理の構造を分析する方法として、記述的 *descriptive* 数量的 *quantitative* 社会心理学的 *socio-psychological* アプローチなどを発展させるにいたったのである。政治学は、哲学・歴史と決別して、人間の政治的行動論 (the Theory of Political Behaviour) として特自のフィールドを確立させつつあるかのようである。

したがって、このような経験的、記述的な行動論の基礎の上に立つ選挙研究は「選挙は何を意味するか」ではな

く、〃選挙はどう作用しているか〃という選挙過程 electoral process を重視する傾向となる。かくて選挙過程論の研究は次の二つの問題すなわち〃人民はいかに投票するか〃(How do people vote?) 〃また特殊の候補者が、なぜ、どのように選ばれるか〃(Why and How are particular candidates chosen?) についての解明を課題とする。

(一) 〃人民はいかに投票するか〃の解明には、次の三つの分析方法が提起される。

(1) 記述的方法 descriptive method この方法は経験的な理論の全体を特徴づける性質をもった方法である。歴史学が生の素材を提起して歴史解釈を行ったり、政治家が制度の運用についての事実的な検討を行ったりする方法であるといえよう。^(一四)この方法での選挙研究は、投票行動の事実をたしかめることである。したがってこの方法は投票行動についての事実の比較研究 comparative studies も同時に意味している。この方法による事実の整序は、例えば英と仏との比較によって、政治行動論的に民主主義の条件を検討する素材として役立つ。

(2) 数量的方法 quantitative method この方法は、選挙の投票が一定の大衆行動 mass behaviour としてあらわれる傾向性を特徴的につかむための方法である。^(一五)ウォーラスが、政治現象を質としてよりも、量として把握することの有効性を説いたことの意味の継承であるといえるであろう。

(3) 社会心理学的方法 socio-psychological method ^(一六)投票行動における集団と個人との関係、宣伝、マス・コミ、等々の投票行動に与える影響などを明らかにするための方法である。

これらの方法を通じて、今日まで、世論の研究、世論によって行われる圧力、世論が選挙のキャンペーンに与える影響、そのような状況に反応する有権者の心理状況と投票行動の分析などが行われてきた。^(一七)

(二) 従来までのこれらの研究は、社会学、社会心理学者によって行われてきたため、第二の問題が軽視されていた。すなわち、〃特殊な候補者がなぜ、いかに選挙されるか〃の問題である。つまり、「政党によってまた政党内で演

ぜられる役割が選挙にどういふ効果をもたらすか」といふ点である。^(一八)

この問題は、候補者の推薦に際して、政党が投票者の好みを考慮して、ノミネーションを行っているかどうかという問題である。この点の考慮がないとすれば、選挙における投票者の選択価値が極めて薄いという点について議論されねばならない。政党が大衆政党として組織化されていけばいほど、候補者の党内における指名が決定的な意味をもつからである。選挙は党内の指名選挙に勝つか負けるかにかかるといふことになり、候補者は有権者の代表というよりも、党を代表し、党に責任をもち、どのような選挙制度が採用されても、議会は党のヒエラルヒーに左右されることになる。かくて政党の構造論的な研究は選挙研究の重要な領域となつていふといわねばならない。

以上のような経験的民主理論の上に立つ選挙研究は、合理主義的民主理論によるそれと異つた選挙過程論を發展させたが、それは、政治的人間の心理現象の把握を意味していたといふことができる。しかし政治的心理の非合理性を過程的に把握しえても、人間の合理的本性と対立した理論の上に立つかぎり、このアプローチ自体からは現代民主主義の危機を克服する処方箋を書くことはできない。それは経験的な人間のコンセンサスに頼るしかないからである。

む す び

選挙研究における選挙制度論的アプローチと選挙過程論的アプローチが、それぞれ伝統的、合理主義的民主理論と経験的、実用的民主理論を前提としていふことをのべてきた。それは現代政治学上の政治現象把握における形態論と行動論との対立状況をそのまま反映しているといふことができる。前者は政治の論理を明らかにしようとし、後者は政治の心理を把握しようとした努力の過程である。しかし、前者が観念的合理主義の理論構造をもち、後者が現実的行動主義の理論構造をもつ限り、理論と実践は対立したままである。

これら二つの思想の方法は、マルクス主義の方法によってのみ統一的に把握することができる。マルクス主義は、人間の本性を合理的なものとしてとらえるという方法をもつかぎり、伝統的思惟を継承しているといえる。ただしマルクス主義では、人間の合理的本性をア・プリオリなものとしてでなく、それを社会的な存在すなわち生産諸関係の総体からの規制においてとらえる。そして生産諸関係を、人間の意思が参加しながらも、それとは独立した客観的過程として把握し、その法則性を明らかにする。したがって、人間社会の合理的構成は、この社会の必然性の認識の上に立って可能となることを論証する^(二九)。社会発展の法則を認識した自由な人間の結合として共産主義社会を創造しようとするという意味で、自由な個人とそれの結合による社会との調和を予定する伝統的思惟の継承であるといえる。

同時に、マルクス主義においては、政治における人間の非合理的行動様式（イデオロギーと行動）を階級社会における疎外されたイデオロギーと行動としてとらえてきた。ルカーチが「日和見主義は—プロレタリアの事実的、心理学的な意識状態をプロレタリアートの階級意識ととりちがえているという点にある^(三〇)」とのべたことのなかに、政治的合理性の意味を見出したのである。しかし従来までのマルクス主義者の思考方法のなかには、政治における人間の非合理性の本質を、論理的にとらえることに急なあまり、現実の疎外された政治的行動様式の形態自体のなかにある自然発生的側面を、正しくありのままにとらえることを拒否する観念主義が生れる危険性があった。その意味で、現代政治学が提起した現代政治理論を、帝国主義段階における疎外されたブルジョア的イデオロギーの諸形態として批判、検討することは、現代におけるマルクス主義政治学の緊急な課題であるといえるであろう。

(一) 拙稿『福岡県知事リコール運動と総選挙』（『中央公論』昭和三十三年七月号）『革新勢力の前進と停滞』（『中央公論』昭和三十六年一月号）その他、福岡県における地方選挙の分析などである。

(二) Giovanni Sartori, *Electoral Studies and Democratic Theory* (Political Studies, Vol. 6, 1958, p. 10)

(三) この論文は、一九五七年三月、ヨーロッパの選挙研究に関するオックスフォードのナッフィールド大学での会議に提出されたものである。ナッフィールド大学ではD・E・バットラー氏を中心に、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアなどの最近の選挙に関する数多くの著作・論文が発表されている。(cf. U. K. Kitzinger, *German Electoral Politics*, Oxford, 1960, preface)

- (四) (五) G. Sartori, *op. cit.*, p. 10
 (六) (七) *ibid.*, p. 11
 (八) D. E. Butler, *The Study of Political Behavior*, London, 1958, pp.27-28
 (九) G・H・セイバイン著丸山真男訳『西洋政治思想史』岩波書店一七九頁
 (一〇) D. E. Butler, *op. cit.*, pp. 28—29
 (一一) G. Sartori, *op. cit.*, p. 11
 (一二) John Plamenatz, *Electoral Studies and Democratic Theory* (Political Studies, vol. 6, p. 4)
 (一三) D. E. Butler, *op. cit.*, p. 44
 (一四) G. Sartori, *op. cit.*, p. 12
 (一五) (一六) *ibid.*
 (一七) H. Kelsen, *Vom Wesen und Wert der Demokratie*, II Aufl., SS.24—28
 (一八) G. Sartori, *op. cit.*, p. 12
 (一九) T・D・ウエルドン著永井陽之助訳『政治の論理』紀伊国屋書店一一八—一一九頁
 (二〇) G. Wallas, *Human Nature in Politics*, London, 1908, p. xi 石上・川口訳『政治における人間性』創文社五頁
 (二一) C. Wright Mills, *The Power Elite*, Oxford University Press, p. 300—301 鶴飼・綿貫訳『パワー・エリート』

東京大学出版下、五〇〇—五〇一頁

- (一一一) Massino Solvadori, *Contemporary Political Science*, Introduction, UNESCO, 1950, p. 5
- (一一三) *ibid.*, p.8
- (一一四) D. E. Butler, *op. cit.*, p. 40
- (一一五) *cf. ibid.*, pp. 56—75
- (一二六) *cf. ibid.*, pp. 76—87
- (一二七) *ibid.*, p.115
- (一二八) G. Sartori, *op. cit.*, p. 14
- (一二九) 詳しくは拙稿『マルクス主義組織論序説』（『法政研研』第二八卷第三号）
- (一三〇) G. Lucács, *Geschichte und Klassenbewusstsein*, Berlin: Der Malik Verlag, 1924, S. 86